
コメント

井上 優 「話し手情報・聞き手情報」と文末形式 ——日本語と中国語の場合

木村・森山(1997)は、平叙文と疑問文は、話し手の中で情報が確定しているかないか、聞き手の情報に依存するかないかの組み合わせで記述できるという理論を提案している。この理論は記述能力が高く、一定の普遍性も持っていると考えられる。この論文は、木村・森山の理論を踏まえつつ、日本語と中国語の言語事実をより正確に記述するための修正案を提示したものである。複数の言語を比較する際の「理論」や「枠組み」の立て方について具体的に知ることができる好論文である。(I)

中俣尚己 学習者と母語話者の使用語彙の違い ——『日中Skype会話コーパス』を用いて

会話コーパスに求められる重要な要件に「真正さ」がある。この論文で取り上げられている筆者自身によって作成された「日中Skype会話コーパス」は真正性の高い接触場面コーパスであり、今後広く活用されることが期待される。この論文では、日本語母語話者(NS)と学習者(NNS)の語の使用傾向を品詞ごとに計算し、その傾向性をマクロに論じている。それによると、名詞、動詞、形容詞という実質語では両者の間に差は見られなかったのに対し、副詞などの機能語で大きな差が見られた。これは、実質語の場合は、NNSにとっての未知語があってもNSとのやりとりの中で習得が起りやすいのに対し、機能語ではそうした意味交渉が起りにくいことによると考えられる。今後の接触場面研究、シラバス研究などにおいて参照されるべき好論文である。(I)

張 明 連体修飾形式「的な」の文末用法

近年現れた新しい表現形式に、「的な」で文を言い終わる用法(「的な」の文末用法)がある。この論文は、この新しい用法について、事例を採取し、使われ方を体系的に整理している。現在、こうした漢語系の接辞が文末で用いられるケースが増えてきているが、この論文はそうした新しい形式の記述において参考になる部分が多い。(I)

牟田 綾 副詞「うっかり」と「わざと」

—受動文における副詞の機能に関する一考察

副詞には「主体めあて」のものがあり、そうした副詞は受動文でも主語を指向するとされている。「うっかり」や「わざと」もそうした副詞だが、この論文では、詳細なコーパス調査をもとに、そうした通説とは異なり、これらの副詞が受動文において対応する能動文の主語を指向すること、言い換えれば、表層にある受動文の主語を指向しない場合があることを示している。この論文と同様の結果が他の副詞においても見られるのか、見られるとすれば、それがボイスの研究にどのような影響を与えるかなど今後の展開に興味を持たれる。(1)

黄 慧 オノマトペの副詞的用法に関する考察

—大規模書き言葉均衡コーパスを用いて

オノマトペの文法的側面について、大規模コーパスを活用して調査・分析した論文。オノマトペに後続する助詞は「と／に／ゼロ」のいずれが多いのか、頻度の高いオノマトペは多様な動詞と共起しているのか、副詞的に使われる場合とそうでない場合はオノマトペごとに異なるのか、オノマトペの音象徴的意味と修飾する動詞のテンス・アスペクト形式は相関するのか、といった問題を取り上げ、教育現場でもすぐに利用できるデータと考察が多く含まれている。(M)

カムトーンティップ タワット

謝罪メールにおける謝罪表現の用法

—約束をキャンセルするメールを分析して

謝罪メールを対象とした研究は少なくないが、本研究は、日本語母語話者の使用する謝罪表現が、キャンセルそのものについての謝罪はもとより、前置き・配慮表現・終結部に現れること、さらには、メール送信そのものに対する謝罪、そして再約束依頼の前置きや終結に用いられることを、実証的に論証した。日本語母語話者が、目上のみならず対等の相手に対しても、その立場や感情に配慮して、複数の表現を複数回併用し、謝罪の意を表すことが改めて示されている。(M)

宮部真由美 従属節に「仮定条件」をさしだす従属複文の主節末のスル

—シナイト節の従属複文を中心に

条件表現の分析を通して、述語のスル形の意味を考察した論文。条件文の主節に現れた、未来を表すスルを、「スル(予定)」、「スル(意志)」、「スル(予測)」に3分類し、「スル(予測)」に「未確認の断定」を表す場合があり、それが「推量」とは異なること、この「未確認の断定」のスルが「～しないと…」という条件文の持つ「注意喚起」「実現・実行してほしいことがらを述べる」という意味に関わることを分析した。条件表現と述語のテンス・モダリティとの有機的な関連について、今後、研究が進んでいくことを期待させる研究である。(M)

宮崎聡子 上級日本語学習者による形容詞中止形の使用状況
——「YNU書き言葉コーパス」の調査を通じて

テ形と連用中止形の違いについては、中級以降、書きことばを扱うようになった段階でかなり指導が行われている。ただし、その対象は動詞に偏っており、形容詞に関する両者の使い分けについてはあまり研究されていない。この論文では、「YNU書き言葉コーパス」を用いて、形容詞のテ形（「クテ中止形」と連用中止形（「ク中止形」）の使われ方を、日本語母語話者、韓国語話者、中国語話者について考察している。その結果、「原因、並列」などの用法では母語話者と非母語話者の間に使用傾向の差が見られた。現在なおざりにされがちな上級学習者に対する文法教育を考えるきっかけとなる論文である。（I）

安 蕙蓮 韓国人日本語学習者による授受表現の習得
——授受補助動詞「テモラウ」に焦点を当てて

日本語の授受表現は習得が難しいとされることが多い。韓国語話者にとっては、テクレルよりもテモラウの方が難しいとされている。それは、テクレルに対応する表現は韓国語に存在するのに対し、テモラウに対応する表現は基本的に存在しないためである。この論文は、韓国語の中にも一部の語彙ではテモラウに近い表現が可能であることに着目し、そうした対応関係の有無とテモラウ文の許容度の関係を考察している。その結果、対応関係があるものの方が習得が行われやすいことがわかった。（I）

西坂祥平 中国語話者による日本語のテンス・アスペクト習得研究
——「結果の状態」用法を中心に

日本語のテンス・アスペクトの習得と母語との関係については議論があり、これに関する中国語話者を対象とした有力な説に崔（2009）がある。ただし、崔論文には母語との関係という観点から解決すべき点が残されている。この論文はそうした問題意識のもと崔論文のデータを再検証したものである。その結果、崔論文では最も早く習得されるとされたル形についても、テイル形との対立の習得はかなり遅れることや、「結果の状態」の習得においては、同じ変化動詞の中でも、日本語に対応する中国語の動詞のタイプによって習得の難易度が異なることなどがわかった。第二言語習得における母語の影響について考える上で示唆を与えるところの多い好論文である。（I）

ボクロフスカ オーリガ

キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響
——ウクライナ人初中級日本語学習者のケーススタディ

ウクライナの2大学で日本語を専攻する初中級・中級学習者12名が、文章読解においてどのような読み誤りをしているのか、そのプロセスを追った研究である。今回の調査では、片仮名表記された「モノ」を「メモ」と読み誤ることにより、文章の理解が阻害されたことが丁寧に示され、「突飛」な原因により生じた誤読解が文章全体の理解に影響することが明らかになった。日本語教師が学習者の読み誤りをどのように探ることができるか、についても示唆を与える研究である。(M)

藤原未雪 中国語を母語とする上級日本語学習者が
学術論文を読むときの困難点
——名詞の意味の誤った理解を中心に

日本語学習者が読解過程においてどのような情報処理を行っているのかは、読解教育の根幹に関わる重要な問題であり、これまでもさまざまな調査が行われてきた。この論文では、上級学習者に自分の専門分野の論文を読んでもらい、その思考過程を母語で発話してもらおうという形で、この問題にアプローチしている。その結果、固有名詞を普通名詞と取り違える、カタカナ語の意味を誤解するなどいくつかの類型化可能な誤りが観察された。こうした誤りを改善するためには、辞書などの引き方を含めた体系的な語彙教育や、学習者の誤りに対応した文法形式の教育が必要となる。読解教育と、文法・語彙教育の相互連携を考えるきっかけとなる好論文である。(I)

稗田奈津江 日本語とマレーシア語における「勧誘」の言語行動
——ディスコース・ポライトネス理論の枠組みに基づいて

この論文の面白さはまず何より、その調査方法・データのユニークさにある。日本語とマレーシア語の「勧誘」および「勧誘に対する断り」に見られる言語行動を対照するため、マレーシア人日本語学習者に、教科書『みんなの日本語』の「勧誘とその断り」の場面を、まずは母語で作成してもらい、それを日本語の会話と対照させ、ディスコース・ポライトネス理論に基づき、分析した。そこから導かれた結論には説得力があり、この手法は日本語教育およびマレーシア教育に対しても、実践的効果が期待される。(M)

朴 恵美 ピア・レスポンスに日本語母語話者が参加すると
発話はどう変わるのか
——逸脱発話を成員カテゴリー化装置の観点から分析する

作文学習におけるピア・レスポンスの談話に見られる、作文の内容と直接関係のない逸脱発話について、学習者のみの場合と母語話者が参加したグループとの違いを比較した研究。前者では、留学生同士の連帯感や親しさが観察される一方、後者では、留学生が日本人学生から様々な関連情報の提供を受けられるとともに日本人に対する依存が見られることを、「成員カテゴリー化装置」という手法を用いて明らかにした。両グループの長所と短所に配慮し、教育目的に応じて使い分ける、あるいは、両者をうまく組み合わせることが、ファシリテーターである日本語教師に求められるとの指摘は、こうした授業活動を運営する教師の参考になる。(M)

中島由季子 指導法の違いが学習者の短文作成に与える効果
——教師による訂正と学習者の自己訂正の結果を比較して

教師の訂正・フィードバックには効果があるのか。こうした疑問を持った経験のある日本語教師は少なくないだろう。この研究は、文型学習において産出された短文について、教師が訂正（直接フィードバック）をしたクラスと、教師が指摘した誤用箇所を学習者が自己訂正（間接的フィードバック）をしたクラスを比較した。その結果、最終のテストでは、後者のクラスが高得点となり、クラス全体の底上げが期待できること、しかし、効果が現れるまでには時間を要することが示された。教育現場の日常的な活動に大きなヒントを与える研究である。(M)

岡 葉子 日本語学校生の学習動機に関する研究
——期待、価値、学習困難意識の関係

日本国内の留学生に関する研究で、日本語学校生を対象にしたものは多くない。本研究は、そうした学習者の学習動機について調査・分析した貴重な研究である。分析の結果、対象言語を「獲得すること」と「利用すること」の一体化が、「科目学習」とは異なる「言語学習」の特徴であること、また「日本語学習は大変だ」という「学習困難意識」が肯定的に捉えられ、学習行動を促進させる働きがあり、必ずしも学習者の意識から排除すべき要因ではないことが示された。学習動機の研究手法についても示唆に富む研究である。(M)